

「平和の創造」への道

五井平和財団の活動には、持続可能な明るい世界の実現に向けて、豊富な経験・見識、深い洞察・英知を有し、様々な分野で活躍する方々のご協力くださっています。

五井平和財団設立25周年、機関誌『平和の創造』100号を記念し、多くの示唆を与えてくれた方々と教育事業に参加してくれた若者たちに、2つの問いにお答えいただき、現在地から平和な未来を展望すると共に、改めて私たち一人一人が、自分事として「平和を創る」ことについて考えたいと思います。

問1▷平和な世界を創造するために、何をご自身の使命とされ、どのようなことに尽力されていますか。

問2▷ご自身の取り組みが、どのような進化をする(あるいは、どのような課題を乗り越える)ことで、平和へのさらなる貢献につながるとお考えですか。

長有紀枝

立教大学大学院教授
認定NPO法人難民を助ける会会長



答1▽質問への回答にはならないかもしれませんが、長年、紛争や虐殺を経験した国々・地域に関わり思うことは、平和な世界を創造する取り組みは、一人の仕事であってはならない、あるいは一人でできることは限られている、だからこそ、その取り組みが、その一人(自分が)がいなくなっても、**持続するよう な取り組みにしなければならぬ**ということなのです。

どれほど素晴らしい政治家が、素晴らしい統治の仕組みをつくっても、その人の死と共に、争い・紛争が始まるということなら、果たしてその人は平和をつくったと言えるだろうかという疑問を常々抱いているからです。

どのような取り組みも最初は、一人の人間のアイデアや取り組みから始まります。その意味で、私たち一人一人の存在、取り組みが決定的に重要でありながら、その次は、その取り組みをいかに、その「一人」によらない、組織的な取り組みにしていくか、ということが重要だと考えます。

同時に、上記と逆説的ですが、一人の人や組織が、持続する平和を創造することは不可能です。いずれの人も、一義的には、今、自分が生きている時代に責任がある。誰かが未来永劫平和が持続する仕組みをつくることを期待するのではなく、**一人一人が、今、自分が生きている時代、今、生活している社会に責任を持って、平和をつくる努力を続け**れば、一人がつくる「点」が「面」や「線」になって、結果として持続的な平和をつくることにつながるとお考えます。

こうしたことを伝えることを使命の一つと考えています。

答2▽あらゆる意味で、自分の力のなさや限界を、日々明確に意識していますが、それでもなお、**自分にはできることがある、という信念を失わない**ことが大切かと思っています。

世界の現実には絶望しないこと。平和な国に生きる私たちが絶望しては、今、困難な世界に生きる人、あるいはそうした中で命を落としていった人に申し訳が立たないと思うからです。